

KANAGAWA HOHYUH CLUB

神奈川県放射線友の会

Newsletter



Vol.11No.1, Jan. 2018
第 41 号

神奈川県放射線友の会 (略称 神奈川放友会)

〒231-0033 横浜市中区長者町 4 丁目 9 番地 8 号

ストーク伊勢佐木 1 番館 501 号

TEL 045-681-7573 FAX 045-681-7578

発行人 長谷川 武

発行日 2018 年(平成 30 年)1 月 15 日

仕事は仲間をつくる

神奈川県放射線友の会 会長 長谷川 武

新年明けましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸を祈ります。本年も宜しくお願い致します。

2018 年(平成 30 年)の新年を迎えましたが、本会にとっては昨年暮れに「創立 10 周年」を祝いましたので、本年は希望に満ちた組織活動が期待される飛躍に挑戦する幕開けの年を迎えました。

2020 年の東京オリンピックが高まる輝かしい時代と益々寿命年齢が延びる中で、皆さんと共に高齢化社会を生き抜く仲間づくりの夢を見ております。

神奈川県放射線友の会(神奈川放友会)の「元氣な活躍の初夢」を見ようと、亡き母親から教わったバカの一つ覚えの一句、回文「長き夜の 遠の睡の 皆目醒め 波乗り船の 音の良きかな(ながきよの とおのねむりの みなめざめ なみのりふねの おとのよきかな)」を紙に書き、枕の下に入れて呪文を唱え祈願しました。これは「新年にあたり、縁起の良い初夢を見ることが出来る」と言われている呪いです。

呪文を唱えた効果があり『「仕事は仲間をつくる、具体的な会の仕事を掲げよ!」とのお告げを頂き、一生懸命に課題づくりを探している理事会が、ニューリーダーのたなびく旗の下で、企画が立案され大拍手で迎えられている』という夢が現れました。

また、その夢の続きは「リーダーとは希望を配る人のことだ!」と言っているのです。

この夢は正夢であり、新年のテーマであることを悟ったのです。ステップアップを目指す本会には、まさに「仕事をつくる」ことだと思う。「仕事をつくる」ということは、多くの人に参加する事業活動のイベント企画であり、これまでやってきた放射線関連の啓発活動であろう。よき企画があれば、人は集まって来ることは間違いない。

人はエネルギーの源であり、人が集まれば何か発想が湧いて来るはず、何もかもは出来なくても、何か手掛けられることがきっとある、と、これまでの人生経験の中から見つける努力と発想が期待されている。

「何か気の利いた仕事を発想したいが、自分らはシニア世代だからもう何も出ないよ!」と諦めるのではなく、未熟ながらも、皆で夢を見れば一味違うものが湧いて来るのではないだろうか。いくつになってもみ

ずみずしさを失わなければ、現状維持を成長に繋げていける気がする。

この気持ちを神奈川放友会は持ち続けたい。納得のゆく仕事を見つければ人は集まって来るでしょう。皆さんで組織としての「仕事=活動」を模索し、仲間を増やすことが社会貢献のひとつだと理解したい。

人生 100 年時代を迎えている高齢化社会の中で、シニア世代 OB の健康保持に役立つことは大きな社会貢献ですので、「神奈川放友会の存在」は社会貢献に繋がっていると確信している。

会員の健康は、その活動効果から見えていると思う。その一つは、イベント開催に参加され社会の中に関わりたくとしており、自らの生活環境の潤いを取り入れている。その二に、機関誌ニューズレターへの投稿で、仕事を作り生き甲斐を共にしている。その三に、会の出版企画等に参加することで、自分の存在意義を認識すると共に社会貢献に参加している。その四に、会への参加は自分を励まし、精神的にも肉体的にも健康を保つ起爆剤になっている。その五に、シニア世代として「憩いの館」が提供されているので、放談会の機会が多く健康保持目標の支えになっている。等を上げることが出来る。

「第一線の退職後は毎日がゴールデンウィークだ」と暇を持て余すだけではなく、自分が持っている専門知識や特技や時間などを、些細ながらも社会貢献に役立てたいと願っている方々も多いので、会の創立目的からも個人の参加が、組織団体としての活動に繋がっていることを理解して頂きたい。

輝くべきシニア時代の青春時代をひとりになって家に閉じこもっているのではなく、現役時代に在籍した組織の OB として、神奈川放友会で「人が集まれば仕事は見えだされる」ことを理解し、参加することで社会のひとりぼっちを解消したい。会員として存在することが刺激であり、自然体で健康への手助けとなることができ、社会貢献の一つになることを認識したい。

「仕事・目的があれば健康が保てる」神奈川放友会はそのお役に立ちたい。また、放友会は皆さんが創るものだが、肩ひじ張らずに「シニア世代の仲間と生き甲斐を探してゆきたい」ものと願っている。

創立 10 周年記念式典 報告

編集担当：櫻田 晃

早朝の秋雨も止み時々晴天となった良き日に、観光客で賑わう横浜中華街において、「神奈川県放射線友の会創立 10 周年記念式典」を開催しました。記念すべき式典を成功裏に終えることができましたので、以下の通りご報告いたします。

開催日 2017 年 (平成 29 年) 11 月 11 日 (土)
 12:00 ~ 14:00
 会 場 横浜中華街市場通り「北京烤鴨店」
 (ペキンカオヤーテン) Tel 045-305-6677

記念式典次第

総合司会：上前 忠幸 副実行委員長

1. 長谷川会長挨拶
2. 橋口実行委員長より「創立 10 年」の経過報告
3. 来賓あいさつ
 公益社団法人神奈川県放射線技師会
 大内 幸敏会長 (代理 田島隆人副会長)
 日本画像システム工業会経済部
 野口 雄司部会長
 前県会議員 合原 康行氏
4. 記念講演
 「復興 6 年！東日本大震災被災地を訪ねる」
 司 会 長谷川 武
 報告者 福田 利雄
5. 放談会
 「これからの放友会活動を語る」
 司 会 早瀬 武雄
6. 閉会の言葉

小松崎眞一 副実行委員長・副会長

出席者 25 名

柳生 博	・ 加藤 功	・ 松枝 由美
氏家 盛通	・ 星野 光雄	・ 阿蘇 久
中島 義人	・ 宮原 新吾	・ 齋藤 莊繁
合原 康行	・ 菊田 晴代	・ 田島 隆人
野口 雄司	・ 長谷川 武	・ 橋口 邦紘
小松崎眞一	・ 中村 豊	・ 橘 亨
上前 忠幸	・ 櫻田 晃	・ 福田 利雄
小嶋 昌光	・ 仙臺真紀夫	・ 本田 義和
早瀬 武雄		

式典は、定刻に総合司会を務めた上前忠幸副実行委員長の開会あいさつに始まり、次第に沿って進められました。最初にあいさつに立った長谷川会長は、「これからも放射線技師としての仲間意識を大事にしながら、資格を生か

した活動等を通して社会貢献をしていきたい。」「本会が、会員の皆さんにとって、いつでも気軽に参加し立ち寄れる“憩いの館”であり続けたい。」などと今後の活動方針について述べました。



— 長谷川会長 —

続いて、来賓の 2 名の方からご祝辞をいただきました。最初に、公益社団法人神奈川県放射線技師会大内幸敏会長の代理としてご出席いただいた田島隆人副会長から大内会長のお祝いメッセージが代読されました。

そのメッセージでは、今後ともますます両会が連携を密にし、協力関係を築いていきたい旨表明されました。また、本会会員でもあります、日本画像システム工業会 (JIRA) 経済部会長の野口雄司氏より、これまで JIRA で本会会員の皆さんと共に仕事を続けられたことへの謝辞と共に、「今後ますますのご発展を」との励ましのお言葉をいただきました。お二人には、改めて感謝の意を表したいと思います。



— 田島県技師会副会長 —



— 野口 JIRA 経済部会長 —

さて、プログラムの 4 番目は、「復興 6 年、東日本大震災被災地を訪ねる」と題した記念講演でした。講師は、東海大学病院 OB の福田利雄氏にお願いしました。



— 被災地の今をまとめた文書 —



— 記念講演中の福田さん —

講演内容の詳細については、ニュースレター40号2、3ページに載っていますのでぜひお読みください。氏は放談会で話題となり被災後6年目を迎えた現地を訪ねる企画に参加され、復興中の現状を「見て」、「聞いて」写真に収めてこられました。

行先は、長谷川会長の故郷である岩手県は、陸前高田市、気仙沼市、大船渡市などです。今回、その後の復興状況、現地の人々の生活の変化などについて丁寧にペーパーにまとめてお話しくださいました。マイク無し、映写なしなど、いつもと勝手が違う講演会でやりにくそうでしたが、氏のリアルな講演により被災地の今を知ることができとても有意義でした。

記念講演の後は、恒例の放談会が行われました。放談会では早瀬副会長の指名により順次参加者全員からの近況報告がありました。いまだに現場で活躍中の方、悠々自適の方、趣味や新しい分野に挑戦中の方などなど、それぞれ生き生きはつらつとした様子が伺える報告会で大いに盛り上がりました。今回会場となった北京烤鴨店(カオヤーテン)は、編集担当の小嶋理事の同級生が支配人を務めているという縁で利用させていただきましたが、中華街は市場通りに面しており、北京ダックが売りの一つと伺いました。味、ボリューム共に言うことなしで皆さんも満足そうでした。以下、その様子をお伝えします。



記念式典の締めは、この式典開催に際して副実行委員長として企画全般を任された小松崎副会長により、一本締めが行われました。小松崎副会長は、企画委員のサポートを受けつつ、今回の式典に合わせて作成した10周年記念誌(写真1)の取りまとめでも大活躍されました。過去の取り組み事業の整理や記録の掘り起こしなど本当にお疲れ様でした。この労作をぜひ手に取ってお読みください。



— 小松崎副会長の音頭で閉会の一本締め —



— 参加者全員で「息を吸って…」(笑) —

最後に、このイベントに合わせて同時に発行した「食と放射線」副読本第Ⅲ版をご紹介します。この副読本は、過去シリーズで2冊発行していますが、今回は特に大震災・原発事故以来、依然として根絶されない偏見や風評被害にスポットを当て、少しでも偏見や誤解を解いていきたいと願い作成した渾身の一冊です。(写真2)一冊税込み1,000円での販売です。残り少なくなっていますので、お入用の方は早めに下記あてお申込みください。

■メール : kanagawahohyuh2009@jcom.zaq.ne.jp

■問合せ先: 事務所 045-681-7583

写真1

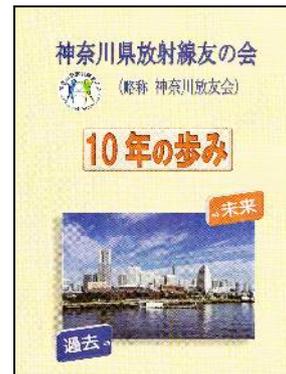


写真2



スイス・アルプス山巡り

中村 豊 (会員番号 8)

アルプス三大北壁を実際に観たくなり、アルプスのほとんどの名峰を巡る少しハードな旅に出掛けた。スイスは九州ほどの大きさで山岳地帯60%、森林30%の自然に満ちた国である。南にイタリア、西にフランス、北はドイツ、東はオーストリアに囲まれ、言語は近隣の地域性を有しているが、スイス人は特有な気質と文化を持っている。スイス東部のハイジの里マイエンフェルトから時計回りに1週間でアルプスを巡った。

山岳の天気は変化が激しく、朝は晴れているが午後は雲が湧き、山を隠してしまう。最初のベルニナ (4049m) アルプスではモルテラッチ氷河の雄大な広がりを見る。



ベルニナアルプスとモルテラッチ氷河

南部ヴァリス州のマッター谷の奥に位置するツェルマット村はアウトフライ (自動車乗り入れ禁止) で環境に配慮し、マッターホルンやモンテローザなどの登山基地として有名である。2015年はアルプス登山の幕開けとなったウインパーのマッターホルン初登頂から150年に当たる。それを記念して、ヘルンリ陵ルートにはLEDが灯された。赤点はザイル切断の滑落事故現場である。



夜間30分間点灯されたヘルンリ陵

明治31年に開通したアプト式の登山電車に乗り、30分程で高山植物の咲き乱れるゴルナーグラート駅に着く。展望台 (3089m) からは岩と氷河の世界が見渡せる。



エーデルワイス



チングルマなどの花畑



世界遺産ランドヴァーサー石橋を渡る氷河特急

19世紀後半から開発されたスイスの鉄道網はスイス全土に行き回り、観光には交通手段ばかりではなく、美しい車窓風景を楽しませてくれる。第2回、第5回の冬季オリンピック開催都市のサン・モリッツからレーティッシュ鉄道アルブラ線に乗り、3連続のループ、アルブラトンネル、ランドヴァーサー石橋などの名所を巡り、美しい教会を中心とした小さな村々の牧歌的な景色が途切れることなく続く。



3大北壁のひとつマッターホルン (4478m)

次の日はフランスのシャモニーからロープウェイでエギューユ・ドゥ・ミディ展望台 (3842m) に昇る。ボゾン氷河の上にアルプスの最高峰のモンブラン (4810m) が押し掛かっている。モンブランは雄大だが、フランス側には鋭さは無い。それに比べて廻りの峰々はヴェルト、ドリユ、シャモニーなど雪を纏わないほどの針峰群が連なっている。左奥には3大北壁のひとつグランドジョラス (4208m) が聳えている。この他にもモンモディ (4466m)、タキュル (4248m)、ダンデュジェアン (4013m) など4千メートル峰が控える。シャモニーの街が下に小さく、美しい。

の山をトンネルで貫くユングフラウ鉄道に乗り、ユングフラウヨッホ駅 (3454m) からエレベーターで スフィンクス展望台 (3571m) に昇る。南にアレッチ氷河が巨大に横たわり、その右にユングフラウの大きな山塊が眺められる。雪原に出るとピラミッド状のメンヒが聳える。



グランドジョラス(4208m)など 4000m級の峰々



1912年開通のユングフラウ山岳鉄道



シャモニー針峰群 後方はドリユ針峰群



ヨーロッパ最長のアレッチ氷河(全長 22km)

アルプス三大北壁難関のアイガー北壁を観るため、クライネ・シャイデック (2.4km) まで高山植物の咲く山道をハイキング。雲に隠れていた 2000m 近いアイガーの北壁がだんだん見えてくる。これで、長いようで短く感じられたアルプス三大北壁観光の旅が終わった。



シャモニーの美しい街並み

山旅の最後はベルナーオーバーランドのユングフラウ、メンヒ、アイガーの名峰巡りである。メンヒとアイガー



アイガー(3970m)北壁

スイスは国民皆兵の永世中立国、直接民主制、連邦制、EU 非加盟など観光以外のスイス人気質や歴史などを知りたい方には、國松孝次氏 (狙撃された元検察庁長官、元スイス大使) の「スイス探訪」をお勧めする。

健康のために…新たな挑戦

櫻田 晃 (会員番号 21)

2016年5月にWHO(世界保健機関)が発表した世界保健統計2016によると、WHO加盟194の国と地域を対象とした健康寿命(自立した生活ができる期間のこと)は男女平均で世界一位は日本で74.9歳、二位はシンガポールで73.9歳、三位は韓国で73.2歳とトップ3はなんとアジアが占めるとのことです。アジア凄いですね。

さて、人間誰しもいつかは死を迎えますが、できることならその直前までは健康でいたいと願うのは当然のことでしょう。私もそう願っている一人です。(笑)

「定年退職後は、健康のために何かせねば」と漠然と考えていたのですが、たまたま家の近くにスポーツジムができたのを機に一念発起。62歳にして本格的に水泳を始めたのでした。水泳は、お金も掛からないし、全身運動で大げなもなさそうだし、歳相応にできそうだし…と考えたからです。今、週平均3~4日はプールに通うほどハマっています。

思えば、小さい頃から水泳は苦手で嫌いでした。せいぜい、平泳ぎ(今考えると平泳ぎとは似て非なるモノ)が少しできる程度でした。また、クロールは息継ぎさえできませんでした。背泳ぎ、バタフライなどともありません。それでも、バタフライだけは「あんな風に泳げたらいいなあ」とあこがれを持っていました。

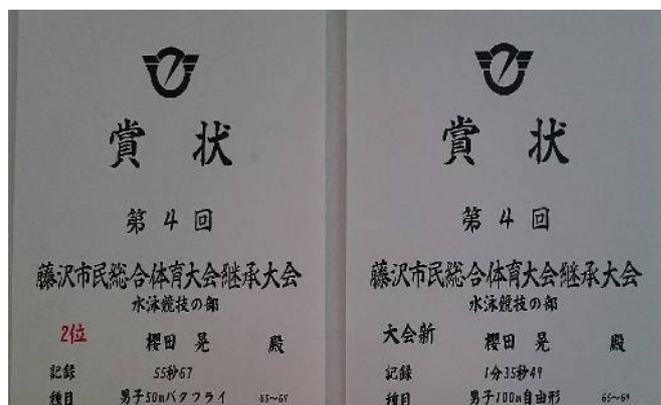
ジムができて、数か月経った頃、有料の水泳スクールが始まることを知り、早速申し込みました。開設時から、初心者を対象とした無料のプログラムがあり、それへは毎回参加していました。しかし、そのプログラムだけでは物足りなさを感じ、「どうせやるなら、早くきちんと泳げるようになりたい」という思いが強くなり、有料コースも受けることにしたのです。有料コースは、最初は二人、そのうち3人、4人と増え、今は40歳代が一人、50歳代一人、60歳代は二人の計四人で週1回の練習に励んでいるところです。そして、水泳を始めてから3年経った現在、あこがれのバタフライをはじめ、何とか4泳法ができるようになり、個人メドレーまで楽しめるようになりました。「嬉しい!」の一言です。



—あこがれのバタフライを泳ぐ—

苦手だったクロールもゆっくりなら1,000m程度泳げるようになりました。ここまで上達できたのは、もちろん良き指導者のおかげでもあります。個人的にもオリンピック選手の泳ぎをみたり、教科書を読んだりして研究もしました。

そして、一昨年は腕試しとばかりに、無謀にも藤沢市の市民水泳大会に初めて参加しました。2種目までエントリー可能で、100m自由形と50m平泳ぎに挑戦しました。その結果は、自由形2位、平泳ぎは3位と思いがけなく良い結果でした。この時は初体験でもあるので「完泳すること」が第一目標でした。それが出来ただけでも大満足でした。この結果には実は訳があります。各競技、5歳区切りの年齢別で順位を競うのですが、私の年齢枠には3人しか参加していなかったのです。(笑)



—写真2 今年いただいた賞状—

この前年の結果に気を良くして、今年(2017年)の夏も昨年の記録を少しでも上回るようにと挑みました。結果は、なんと意外なことに100m自由形は大会新でした。これにはビックリでした。各年齢別で、この種目は一番エントリーが多いだろうと思っていたので「まさか」です。記録は大したことはありませんが、名誉なことに歴史に名を刻むことになりました。もう一種目は50mバタフライでした。この記録も大したことありませんが、なぜか2位でした。そうなんです。同年代は二人だったからです。(笑)

もちろん、これらの結果には大満足です。ただ、今年の大会で悔やまれるのは、レース数日前の飛び込み練習で左大腿四頭筋の肉離れを起こしてしまったことです。ふだん練習できない飛び込みがうまくいくようにと、つい張り切り過ぎました。(泣) 昨年よりは、自分でも泳力が上がっていると思っていたので、できればクロールで4~5秒短縮したいと狙っていました。また来年挑戦です。

大会には、70歳、80歳代でも元気に参加している方が結構いらっしゃいます。私もそういう方々のように、今後もできるだけ永く自らの記録への挑戦を続けていければと願っている今日この頃です。

原発事故 7 年目 **揺れる甲状腺検査**
 NHK BS 1 スペシャル 2017 年 11 月 26 日 22:00~24:00 より引用

福島第一原発事故後、相次いで見つかった子どもの甲状腺がんに対し、専門家はチェルノブイリとの比較などから「放射線の影響は考えにくい」と報告している。

また、「過剰診断」の可能性が指摘されて、「不要な手術」が行われる恐れがあるので「検査を縮小すべき」という声も挙がり、波紋が広がっている。

前編は、最新研究を交え放射線被ばくの関係を紹介、後編では「検査のあり方を巡る混乱」の根源についてまとめられたものでした。概要を紹介します。

38 万人の甲状腺検査の結果

原発事故によって広範囲にわたり住民が被ばくするという、かつて経験したことのない事態に直面している福島県は福島県立医科大学と共同で、18 歳以下のすべての子ども 38 万を対象に甲状腺検査を行っている。

調査対象の 38 万人のうち 194 人（良性一人）に小児甲状腺がんが見つかり、164 人に悪性ないし、悪性の疑いであった。計画検査により、1 巡目（2011.10～2014.3）に 116 人が、2 巡目（2014.4～2016.3）に 71 人（65 人は 1 巡目に見つかっていない）、3 巡目は 7 人が見つかった。150 人が手術を受けている。

1 巡目は、大規模な検診が行われたため、ほとんどの場合、治療の必要性のない、いわゆる「潜在がん」だった可能性が高いとの見方が大勢となりつつある。

2, 3 巡目は原発事故との関連の疑いが晴れないことなどが紹介された。

全国で同じように検査したら、同じような数字がでているので、放射線との関連が確定できない。

検査は、一次検査（超音波検査）で一定のしこりなどを診観している。二次検査（精密検査）は、細胞検査などでがんの疑いと診断されると手術となる。

検討委員会はこれらのがんについては、「チェルノブイリと比較して、被曝線量が低いこと、チェルノブイリは 4 年後から発生していること、年齢などから考えて、放射線影響は考えにくい」とその理由を述べている。

また、遺伝子解析の専門家は福島県の甲状腺がんから取り出した DNA は、68 人の分析では BRAF(ブーラフ)に正常者と異なるタンパク質の変異があり、チェルノブイリ例とは異なり、放射線との関係はないと診観している。

「必要がなかったのに、切除術を受けた子どもたちが多かったのでは」という後悔、苦悩が広がっている一方、「子どもや若年層のがんは、切除術してはじめてリンパ節転移など、重篤な症状が確認できるなど進行が速いケースが多々ある」という、「未解明な部分が多い」「進行の速さ」「診断や治療の難しさ」を指摘する専門家が多いとも教えてくれた。

1986 年チェルノブイリ原発事故での甲状腺がんについての国連への報告は 6000 人以上で、放射線の影響だと結論が出されている。

ところが今、その検査を担う医療機関の対応をめぐり、住民の間に不信感が高まっている。検査の過程で当初、住民が必要とする情報が提供されなかったりして、住民の不安に寄り添う姿勢が見られないと言う。チェルノブイリ原発事故の影響に向き合ってきたベラルーシでは、こうした検査を長期的・継続的に行い、早期発見、早期治療につなげている。しかし、福島県で今のような状態が続いていけば、受診する人が減っていく可能性があり、県立医科大学はこうした事態を受けて、新たな取り組みを始めているようだ。

- 潜在がんで手術は本当に必要だったのか？
 - 患者たちは今も再発等への不安を持っている。
 - 患者のケアが最も大事なのに、そのケアと経済的支援が放置されたままである。
 - 原発事故さえなかったならば、このような事態になってはいなかったのは確かである。
- 等々と住民は思い困惑している。

「検査縮小」と「縮小させてはならない」と専門家の意見が分かれているが、患者や福島県民のほとんどは縮小に反対している。また、内部被ばくの実態も原因も明らかになっていない現状で、「放射線の影響はないと結論づけるのは早すぎる」という研究者もおり、縮小はあり得ないとも思われている。

住民の不安に向き合うには何が必要なのか？

福島では住民側、医療側の様々な取り組みがあるが、福島で起きている混乱の経緯、苦闘する現場、患者及び家族たちの苦悩がある。

番組を見た市民の反応

- 1) 医学界では影響なしと完全に結論をだしているのに、全然報道されていない。
- 2) BS では報道しているけど、地上波では報道しない模様だが、なぜだろう。
- 3) 甲状腺を手術で取った子どもが、自暴自棄になっている模様だ。
- 4) 「潜在がん」は見つからないまま一生終えることも多いので、複雑な思いだ。

この放送を見たら、だいぶ印象が変わるのではないかな。心身ともに苦悩を負った子供たちへの責任を国・東電は真摯に受け止めなければならない。

みんなの広場

■ 平成 29 年度秋の叙勲

千田久治・坂田幸三さん秋の叙勲受章

元川崎市立川崎病院放射線診断科技師長千田久治 (65) さんが瑞宝双光章、元県立がんセンター病院医療技術部放射線治療技術科部長坂田幸三 (62) さんが瑞宝単光章を、平成 29 年度秋の叙勲で受章されました。

受章おめでとございます。

■ 目の被曝を防げ

東電新基準を先取り 線量：年 150 → 50mSv

放射線業務従事者の水晶体の被曝線量限度は、放射線障害防止法により年間 150mSv に定められている。

しかし、水晶体の放射線に対する感度が従来よりも高い可能性が出てきたために、放射線の人体への影響などを検討している ICRP (国際放射線防護委員会) は、2011 年に「線量限度を年間 50mSv、かつ 5 年間で 100mSv」に引き下げるよう勧告をしている。

これを受けて、日本の原子力規制委員会の放射線審議会は、今年から規制の見直しに向けた議論を始めています。

この議論では局所的な線量限度の変更なので、全身の線量限度には影響しないとされている。

東京電力は国の規制改正を先取りして、福島第一原子力発電所の作業員らの目の水晶体の被曝線量限度を平成 30 年 4 月から自主的な管理地として、「年間 50mSv」を適用する方針を固めたと報道されている。また、「5 年間で 100mSv」についても導入を検討するとしている。

東電が水晶体の被曝線量限度を自主的に先行して引き下げる背景には、放射線量の高い福島第一原発での廃炉作業の放射線管理の難しさがあるためだとされている。

福島第一原発では 1 日 7000 人ほどが働いており、廃炉目標は 2041～51 年までつづくが、作業可能な作業員を確保するために線量限度の引き下げにより、人員確保の対策を早めに対応したと思われる。

白内障の発症を防ぐのが目的で、今後は放射線量が高い現場の作業員は配置換えなどを進めると言う。

尚、東電は今後、一部の作業員のマスクの中に線量計を付けて、水晶体の被曝線量をより正確に調べることも検討中だとされている。

福島第一原発では炉心溶解が起きた 1～3 号機の原子炉建屋や、汚染水タンクの解体現場など、放射線量が特に高い場所があるので、作業計画の見直しなど、作業員の被曝線量をなるべく下げる努力が求められている。

■ 手術不要で完治する乳がんを見極め…

「マーカー」遺伝子を世界初発見

乳がんのうち、手術が不要で完治するタイプの判定に役立つ遺伝子を、国立がん研究センター東病院 (千葉県柏

市) の向井博文・乳腺・腫瘍内科医長らのグループが世界で初めて発見し、今月から効果検証に向けた臨床試験を開始した。

効果が確認されれば、乳がんの 5%程度は手術が不要になるとみられる。

向井医長らはこれまでに、乳がんにも化学療法と放射線治療を行った後、乳房の切除手術をしなくてもがんが消えるかを判定する臨床試験を実施。この結果、特徴的なたんぱく質「HER2」の発現があり、ホルモン療法が効かない「ホルモン陰性」の場合、半数以上は手術せずにがんが消えていた。がんが消えたグループでは、遺伝子「HSD17B4」が働いていないことを突き止めた。手術が不要な乳がんを判定するマーカーになると期待される。

今回の臨床試験の対象は HER2 発現があり、ホルモン陰性で、離れた臓器に転移がない乳がん患者 200 人。がん細胞を採取して HSD17B4 の働きを調べてから、化学療法と放射線治療を行い、がんが消えているかを手術で判定する。約 30 病院で実施する。

2013 年に乳がんと診断された人は約 7 万 7000 人。転移がある場合を除き原則として手術を行う。このマーカーが利用できれば、年 3000～5000 人程度の手術が不要になるとみられる。向井医長は「別のタイプの乳がんや卵巣がんなどでも、このマーカーで手術が不要になる人が分かる可能性がある。患者の負担減や医療費抑制にもつながる」と話している。

9/26(火) 9:53 配信 読売新聞

■ 血液検査・放射線検査「医師の説明不足」4割… 「理解できず」若い世代ほど高く

血液検査や放射線検査などの臨床検査の結果を十分に理解している患者は 3 割に満たず、4 割は「医師が説明してくれなかった」と感じているなどとする調査結果を、日本臨床検査薬協会がまとめた。今年 2 月、国内の 20～69 歳の男女 1000 人を対象に、臨床検査に関する意識調査をインターネットで行った。

検査結果の理解は、「できた」が 28%に対し、「少しだけできた」51.7%、「できなかった」20.3%だった。「できなかった」割合は年齢が若いほど高く、20代は 28.5%、30代は 27%だった。

検査の内容と結果を医師が説明したかについては、「説明してくれた」と回答したのは「必ず」と「多少」を合わせて 59.6%に対し、「説明してくれなかった」は「あまり」と「ほとんど」を合わせ 40.4%で、検査に疑問や不安が残る可能性があるとして分析している。

協会の担当者は「患者側にも一定の知識がないと医師に説明を求めにくい。検査結果を知ることは治療の第一歩なので、患者の理解が深まるような取り組みを進めたい」と話している。

2017 年 10 月 2 日 読売新聞夕刊

編集後記

☆ ★ ☆ ★

Newsletter の発行が 11 年目に入ります。

会員の皆さまの近況報告を掲載したいと考えています。近況をお知らせください。(メール・手紙・FAX・電話・理事に手渡し)でも、かまいません。

櫻田 晃 小嶋 昌光 仙臺 真紀夫